

# ドイツ連邦大統領クリスチャン・ヴルフによるドイツ統一 20周年記念式典の演説 於ブレーメン

中 島 大 輔 訳

2010年10月3日  
ブレーメン

変更の可能性あり  
演説を有効とする

私たちは今日、20年前の私たちの成果を祝います。すなわち祖国ドイツの統一と正義と自由<sup>1</sup>です。私たちは一つの国民がめったに経験することのない、あの新たな時代の幕開けとなった一日を想起します。10月2日から3日にかけての晩のベルリンからの映像を思い出します。帝国議会議事堂の前に集まった人々。深夜直前の張り詰めた期待感。自由の鐘<sup>2</sup>の響き。ひるがえる統一ドイツの国旗。ドイツの国歌。幸福感。涙。私たちの歴史におけるこの歴史的瞬間の団結を思い出します。20年を経た今でも、私の心は大きな感謝の念で包まれます。

さて20年を経て私たちはまた「ドイツ、一つの祖国」<sup>3</sup>になりました。しかし「一つの祖国」とは何を意味するのでしょうか？何が私たちを結びつけているのでしょうか？私たちはさまざまな相違にもかかわらず、一体となった<sup>4</sup>のでしょうか？

最初の答えは明白です。それは私たちの共通の歴史を想起することです。

これにはドイツ統一を可能にしたすべての人々を想起することも含まれます。まず、ねばり強く独裁に抵抗した女性、男性の公民権運動家があります。先日逝去したベアベル・ボーライ<sup>5</sup>はその一人でした。彼女は勇気がどれほど大きなものを動かせるかを示し、それによって多くの人々に勇気を与えました。「私たちが手をこまねくほど大きなものは何一つないし、私たちが気にかけなくてもよいほど小さなものも何一つ

<sup>1</sup> 「祖国ドイツの統一と正義と自由」Einigkeit und Recht und Freiheit für das deutsche Vaterlandとは、ドイツ連邦共和国（旧西ドイツおよび統一ドイツ）の国歌の一節。

<sup>2</sup> 「自由の鐘」とは1950年にアメリカから寄贈されたベルリン・シェーネベルクの市庁舎の鐘。定時（12時）や新年を告げる時鐘のほか、1953年6月の東ベルリンの民衆蜂起および1956年のハンガリーの民主化運動の犠牲者追悼、1961年8月のベルリンの壁建設に対する抗議の際にも鳴らされた。

<sup>3</sup> 「ドイツ、一つの祖国」Deutschland, einig Vaterlandとはドイツ民主共和国（東ドイツ）の国歌の一節。

<sup>4</sup> 「一体となった」zusammengewachsenとの言葉は、ヴィリー・ブランド元西ドイツ首相がベルリンの壁崩壊の際に述べたとされる「本来一つのもので、これから一つに成長していく」Jetzt wächst zusammen, was zusammengehört.を踏まえていると思われる。

<sup>5</sup> ベアベル・ボーライ Bärbel Bohley（1945-2010）は東ドイツの画家で公民権運動家。新フォーラム Neues Forumを通して、東ドイツの内側からの民主化・自由化に努力した。2010年9月11日に死去。

ない。」これは彼女の文章です。私は今日でもこの言葉に心動かされます。私はベアベル・ポライに首を垂れます。また自由のために戦ったすべての人に首を垂れます。

教会は自由への勇気に目覚めた人々に庇護を提供しました。多くの人々が「何かが変わらねばない。しかしそれだけでは何も変わらない。私を変えねばならない」と感じたのです。そして月曜の祈りと月曜のデモ<sup>6</sup>から始まりました。最初はわずかの参加者でしたが、次第に多くの勇気ある人々が路上に出るようになりました。東ドイツ全土です。それは「ライプツィヒの奇跡」となりました。その勢いと平和的経過はまさに奇跡でした。転換点でした。人々が動かしたのです。人々は自らの手で独裁からの解放を勝ち得たのです。それも血を流すことなく。自由を求める人間の意志は常に存在しました。挫かれることなく。しかし今やその時期が到来したのです。1953年に戦車で押しつぶされたもの<sup>7</sup>が、1989年にはもはや阻むことのできないものになりました。これは人々の歴史的成果です。彼らの勇気は世界に大きな感銘を与えました。

ヨーロッパの自由化運動を抜きにしてドイツ統一は考えられません。たとえばポーランドの労働者ならびに彼らを支持し、その場で「恐れ

るなかれ」と説教したヨハネ・パウロ二世。「連帯」はひとつまたひとつと自由を獲得し、それによって最終的には私たちの自由も獲得してくれました。このことを私はとりわけここで、ダンツイヒ（グダニスク）の友好都市であるこのプレーメンで、声を大にして言いたいと思います。またグラスノスチとペレストロイカの過程で、他国を支配しようとするソビエト連邦の覇権を放棄し、それにより各国の自己決定に道を開いたミハイル・ゴルバチョフ。あるいは東西国境を最初に開いたハンガリー政府<sup>8</sup>。ロシア人、ポーランド人、ハンガリー人。これは私たちが予期しえなかった友人からのきわめて大きな救いの手でした。

私たちは、人民議会と連邦議会がドイツ統一に向けて多くの小さな施策をめぐって奮闘した月日を思い出します。これは東西ドイツ双方の政治と行政による前例のない成果でした。

不安や抵抗がありました。とりわけ外国では多くの人々が、再び統一ドイツが軌道に乗るのは良いことなのだろうかと疑問に思っていました。20世紀の前半にドイツから始まった誤りや恐怖や破局のことを考えれば、誰がそうした人々を悪く取ることができるでしょうか。

広い視野を持つ政治家がこうした不安や抵抗

<sup>6</sup> 「月曜のデモ」 Montagdemonstrationen とはライプツィヒのニコライ教会で1989年9月4日に始まった民主化運動。デモは1980年代から同教会で行われていた平和の祈りに続く形で行われた。月曜デモは東ドイツ全土にも広がり、ベルリンの壁の崩壊を導く「平和革命」の嚆矢となった。

<sup>7</sup> 1953年6月17日に東ベルリンで発生した民衆蜂起を指す。労働者のノルマ引き上げを決定した政府に対し、建設労働者がデモを行うと、ストやデモなどの抗議活動は東ドイツ全土に波及するが、ほどなくソ連軍の介入により鎮圧された。西ドイツでは1954年から1990年まで6月17日を「ドイツ統一の日」と定め、祝日としていた。

<sup>8</sup> ハンガリーは1989年6月末にオーストリアとの国境の鉄条網を撤去していたが、9月10日から11日にかけての晩、オーストリア国境を開放し、数万人の東独市民に西側への脱出路を開いた。

の克服に手を貸してくれました。ヘルムート・コール元首相<sup>9</sup>とハンス・ディートリヒ・ゲンシャー元外相<sup>10</sup>、ならびにローター・デメジエール元東独首相<sup>11</sup>です。道を開いたのはコンラート・アデナウアー元首相<sup>12</sup>、ヴィリー・ブランド元首相<sup>13</sup>、ヘルムート・シュミット元首相<sup>14</sup>です。彼らすべてが信頼を醸成したのです。この信頼なしに再統一はありえなかったでしょう。また40年以上にわたってドイツ連邦共和国と西ベルリンの自由を保証してくれた北大西洋条約機構の友人なしにはありえなかったでしょう。ジョージ・ブッシュ〔父〕元大統領によるドイツ統一への支持を私たちは決して忘れません。こうしたすべてのことに対して私たちは限りない感謝の念を抱いています。

ドイツは統一国家として再び国連の対等のメンバーになることができました。私たちは友人に取り囲まれています。何という大きな幸せでしょうか。わが国にとっても国民にとっても。

二つの国家から一つの国が生まれました。それは問題がなかったわけではありません。しかし多くの連帯がありました。西ドイツの人々はその専門知識と企業家精神と政治的経験により、東において東のために力を尽くしました。しかし、私たちの国が再び一つになるために、変革の最も大きな部分を担ったのは東ドイツの人々

でした。彼らは自らの人生をいわば一からやりなおし、日常生活を新たにつくり変え、好機を活かすことを迫られました。そしてそれを実行したのです。変化への信じがたいほど大きな心構えを持って。これは今まで十分に評価されてきませんでした。

多くの人々は自分の希望を実現することができました。ついにどこにでも好きなところに旅行し、好きな分野を専攻し、好きな本を読み、誰とでも好きなことを議論し、自由に職業を選択し、自分の考えを堂々と主張することができるようになったのです。しかしそのほかの人々は何年も個人生活の再スタートをめぐる苦闘しました。中には今日にいたるまで苦しんでいる人もいます。

たしかに維持すべきものも失われました。しかし一方で限りなく貴重なものも得られました。それは、変革への勇気を持って自由のうちに自分の人生を設計することができたという東ドイツの人々の経験です。これにより彼らはドイツの歴史に重要な一章を書き加えたのです。これにより彼らはドイツ全体を別のドイツに作り変えたのです。これにより彼らは、個人の幸せと私たちの団結のために、変革を克服するすべを身をもって示したのです。

<sup>9</sup> 1982年から1998年まで第6代ドイツ連邦共和国首相。キリスト教民主同盟（CDU）所属。

<sup>10</sup> 1974年から1992年までほぼ連続してドイツ連邦共和国外相を務める。自由民主党（FDP）所属。

<sup>11</sup> 1990年4月12日から統一前日の10月2日までドイツ民主共和国首相。キリスト教民主同盟（CDU）所属。

<sup>12</sup> 1949年から1963年までドイツ連邦共和国初代首相。キリスト教民主同盟（CDU）所属。

<sup>13</sup> 1957年から1966年まで西ベルリン市長、1969年から1974年まで第4代ドイツ連邦共和国首相。社会民主党（SPD）所属。

<sup>14</sup> 1974年から1982年まで第5代ドイツ連邦共和国首相。社会民主党（SPD）所属。

ここから「ドイツ、一つの祖国」？という疑問に対する二番目の答えに入ります。それは今日何を意味しているのでしょうか？統一から20年、私たちは大きな課題に直面しています。すなわち変革への勇気を持ち、ドイツにおいて、また急激に変化する世界において、新たな団結を見出すという課題です。なぜならこのような世界においては、昔の確信に基づいた約束は空手形となるからです。

私たちの国はさらに開かれました。一層世界に向いています。以前より多面的で、差異に富むものとなりました。日常生活と生活設計が変わりました。私たちはその理由を知っています。世界規模の競争、グローバルな貿易ルート、新たなテクノロジー、境界のないコミュニケーション、移民の流入、人口構成の変化、そしてそう、これもあります、外からの新たな脅威です。人々の暮らす世界は離れ離れになっていきます。老人と若者の世界、高額所得者と最低生活水準の人々、安定した雇用関係のある人とない人、国民と国民の代表たる政治家、異なる文化と宗教を持つ人々の世界です。

差異の中には不安を呼び起こすものもあります。これを否定してはなりません。しかし、にもかかわらず次のことは何度言っても言い足りないでしょう。我が国のような自由な国は多様性こそが命であり、異なる人生設計や新しい考え方に対する開かれた姿勢が命なのだ。さもなくば国の存続は望まれません。行き過ぎた平等は個人の努力を窒息させますし、それは自由を代償にしなければ手に入りません。この国は相違を我慢しなければなりません。むしろ相違を求めなければならぬのです。しかし行き過

ぎた差異は団結を危うくします。ここから導かれる私の結論は、多様性を尊重しながら、私たちの社会の裂け目を塞がねばならないということです。その作業は幻想を排除し、真の団結を生み出します。これが「ドイツ統一」の今日の課題なのです！

1989年に東ドイツの市民は叫びました。「私たちが国民だ、私たちはひとつの国民なのだ！」これは、容易に理解できる歴史的な理由から長いこと地中深く埋められていた国民感情を呼び覚ました。この間、ドイツ全土で新しい自信が育まれました。こだわりのない愛国主義です。私たちの国に対する率直な支持です。過去に対する大きな責任を自覚し、その上に未来を築こうという国に対する支持です。この文字どおりの自己意識は私たちにとって有益なものです。それはまた他者に対する私たちの関係にも良い影響をもたらします。なぜなら自分の国を愛し、尊重するものは、他者に対しても良い態度で臨むことができるからです。

「私たちはひとつの国民だ！」この統一の呼びかけは今日では、ここで暮らすすべての人々に宛てた招待状にならねばなりません。恣意に基づく招待状ではなく、私たちの国を強いものにした様々の価値に基づく招待状です。「私たち」という言葉をこのように理解することによって、団結が可能になるでしょう。それは最近ここに暮らし始めた人々と、すでに長いこと住んでいるため、時に先祖がやはり外国から来たことを忘れてしまっている人々との間の団結です。

ドイツのムスリムの女性や男性が「あなたは私たちの大統領です」と書いてくるとき、私は

心の底から「そのとおり、もちろん私はあなたがたの大統領です！」と答えます。私がこのドイツで暮らすすべての人々の大統領であるという情熱と確信を持って。

私は70もの国々に先祖をさかのぼる生徒のグループから寄せられた公開書簡を嬉しく読みました。生徒たちはみな、勤勉な青少年を支援する財団の奨学生です。彼らはこう書いてきました。「私たちにとって誰がどこから来たかは問題ではありません。むしろどこへ向かおうとしているのが重要です。私たちは一緒に自分たちの道を見出せるものと信じています。私たちはここで暮らしたいと思います。なぜなら私たちがドイツだからです。」

もちろん誰がどこから来たかには一定の意味があります。もしそうでなかったら残念なことでしょう。しかしこのアピールの最も重要なメッセージは「私たちがドイツなのです」という点です。

私たちがドイツ。そうです、私たちはひとつの国民です。そしてこの外国にルーツを持つ人々が私にとって大事であるがゆえ、私は必要不可欠の議論において彼らが傷つけられるのを望みません。作り話や偏見の固定化や移民の排除を私たちは許してはなりません。それを許さぬことは私たちの最も基本的な国益に叶うことです。

未来は、文化的多様性や新しい思考、外国人や異質なるものに対して開かれた国々のものです。ドイツは全世界との結びつきによって、世

界のすべての地域から私たちのもとに来る人々に対して開かれていなくてはなりません。ドイツは彼らを必要としているのです！有能な人材をめぐる競争において、私たちは最高の人材を引き寄せねばなりませんし、そうした人々がこの国にとどまりたくなくなるような魅力的な国でなければなりません。私の切なるお願いは「誤った対決路線に誘導されないように」ということです。ヨハネス・ラウ元大統領<sup>15</sup>はすでに10年前、賢明かつ思慮深く「不安を抱かず、幻想に陥らず」ともにドイツで暮らすことを私たちに訴えていました。

私たちはすでに三つの大きな嘘に訣別しています。私たちは外国人労働者が一時的にやって来るのではなく、永続的に留まるのだということを理解しました。私たちはたとえ自らを移民の国と定義しなくとも、また私たちの利益に沿う形で移民をコントロールしたとしても、移民流入は起きるということを理解しました。そして私たちは多文化社会の幻想が課題と問題をいつも矮小化させたことを理解しました。国家の援助に対する依存、高い犯罪率、男尊女卑、教育や仕事の拒否。私はこのテーマについて寄せられた何百通の手紙やメールを読みました。私には市民の懸念や不安がたいへん気にかかります。

にもかかわらず、私たちは現在の論争から予測される以上に先を行っています。ここで暮らすためにはドイツ語を学ばねばならないことは共通理解になりました。ドイツではドイツの法と法律が適用されることも共通理解になってい

<sup>15</sup> 1999年から2004年まで第8代ドイツ連邦共和国大統領。社会民主党（SPD）出身。

ます。それもすべての人々に対して。なぜなら私たちはひとつの国民なのですから。

日々統合のために尽力している人は何十万人もいます。その多くの人々は、たとえば統合の手助け役として自発的、非営利的にボランティアで働いています。政治と市民が協力すれば、私たちの自治体もかなりのことを行なえます。私たちの社会をその多様性のうちに、またあらゆる緊張関係にもかかわらずひとつに結びつけるネットワークを、すべての人々がともに形成するのです。

しかしたとえ私たちが現在の論争から想像される以上に先行しているにせよ、まだ十分でないことも明らかです。実際私たちは遅れを取り戻す必要があります。例として、家族全員に対する統合・語学コースや、移民の母国語によるさらなる授業の提供、ここで教育を受けた教師によるイスラームの宗教授業を挙げるに留めましょう。たしかに私たちは規則や義務の順守においてさらなる徹底性が必要です。たとえば学校をさぼる子供たちに対して。これはちなみに私たちの国で暮らす、すべての人々に当てはまることです。

まず最初に私たちには明確な姿勢が必要です。すなわち、国籍をパスポートや家族の歴史や信仰に制限することのないドイツという国についての理解です。キリスト教は疑いもなくドイツの一部です。ユダヤ教も疑いもなくドイツの一部です。これは私たちのキリスト教・ユダヤ教の歴史です。しかしこの間イスラームもドイツ

の一部になりました。およそ200年前、ヨーハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテは『西東詩集』の中でこう歌いました。

「自身と他者を知るものは、これも認識するだろう：東洋と西洋はもはや分かちがたく結びついているのだと」<sup>16</sup>

あの生徒たちは何と言っていたのでしょうか？大事なのはひとりひとりがどこへ向かおうとしているのかだと。彼らは私たちが共通の道を見出すと信じているのです。共通の道は共通の目標についての合意を必要とします。

さて今度は最初の問いに対する三番目の答えです。「ドイツ、一つの祖国」、この国を祖国とすること、それは私たちの憲法とそこに定められた価値を尊重し、守ることにほかなりません。まず最初にひとりひとりの人間の尊厳、言論の自由、信仰と良心の自由、男女の同権です。私たちの共通の規則を守り、私たちの生活様式を受け容れること。これをしない人、すなわち私たちの国とその価値をないがしろにする人は、断固たる反撃にあうことを覚悟しなければなりません。これは原理主義者にも右派・左派の過激派にも該当します。

私たちは当然のことながら、誰もがその能力に応じて共同体に参画することを期待します。

私たちは公共心を悪用する人々を黙認しません。「私たちの社会福祉国家は、お返しの義務のないセルフサービスの店などではありません。」こう簡潔かつ正当にベルリンの少年裁判官キル

<sup>16</sup> 『西東詩集』の「遺稿から」Aus dem Nachlassの一節。



ステン・ハイジッヒは述べました。「国家から養育費を受給したならば、子どもがこれまでとは違う道を歩み、将来自立できるようになるため、せめて子どもを学校に通わせることを共同体は期待して良い」とも述べました。

私たちは、誰であれ私たちの国と文化に何かの貢献をする人を尊敬します。女医、ドイツ語教師、タクシー運転手、テレビの司会者、八百屋、サッカー選手、映画監督、女性大臣<sup>17</sup>など統合の成功例にはこと欠きません。

私たちは私たちの文化的、学問的、経済的成果を誇って良いでしょう。とりわけ我が国の社会的環境や寛容、歩み寄りの能力や連帯です。こうした要素は経済危機にあっても私たちを助けてくれました。労働組合、雇用者、被雇用者。すべての人々が示してくれたのは、和解や交渉や発想豊かな解決を導く力であり、団結する力であり、共通理解に至る力です。これがドイツなのです。

社会において新たな団結が可能になるのは、強者が誰ひとり責任を回避せず、弱者が誰ひとり排除されない場合に限られます。誰もが責任を負い、誰もが責任を持てる立場についての場合に団結が可能になるのです。

長いこと職を探しながら見つけれない人、不安定な職場を次から次へと渡り歩かねばならない人、自分が必要とされていないという感情を抱き、将来への展望を持ってない人。このよう

な人々は失望してこの社会に背を向けます。

エリートに数えられ、責任を担い決定に携わる立場ながら、優雅な独自の別世界に逃避する人。こうした人々もこの社会に背を向けます。残念ながらこれこそ私たちが経験したことです。自分自身が誕生のめぐり合わせやこの国からどれほど恩恵を受けているか、忘れてはなりません。そして私たちの共同体に何かお返しすることを自らの務めと考えねばなりません。

増え続ける中高年は良いことをたくさんもたしています。多くの中高年は、労働時間を減らしながらも、定年以降も自分の仕事を続けようという意欲を持っています。私たちはそれを可能にする必要があります。またボランティア活動に携り、自分の知識と経験を提供する人々もいます。中高年にも自発的に社会保険料を納める年があっても良いのではないのでしょうか？

誰もが自分自身を無用の人間と感ずることもなければ、誰をも無用の存在にしない社会とはどのようなものなのでしょうか？もう何年も前から定職に就いていない人々を、どうしたら社会に統合できるでしょうか？障害のために他の人々と同じ可能性が与えられない人々を、どうしたら社会に参加させることができるのでしょうか？

団結を強める最良の方法は、他者を信頼して、何かを任せることです。人間は誰かに信じられ、支えられれば、多くのことを成し遂げることができます。これを私はたびたび経験しました。

<sup>17</sup> ヴルフ大統領自身ニーダーザクセン州首相時代の2010年4月にトルコ系のアイギュル・エツカン Aygül Özkan (1971-) を同州の社会・女性・家族・健康・統合問題担当相に任命している。エツカンはドイツ初のトルコ系女性大臣となった。

私の息子の通う保育園では、障害のある子供と障害のない子供と一緒に保育を受けています。そこにひとりの男の子がいます。両親はその子の障害のために「せいぜいはいはいしかできないでしょう」と早い段階で告げられたそうです。しかし今では歩くことができます。新しい早期治療教育による援助のおかげです。また両親や先生たちがその子を支援し、彼の能力を信じて何がしかを任せ、彼もまた他の子供たちから学ぶことができたからです。

私たちは子どもから始めねばなりません。かつて多くの人々が、遠い彼方にあるドイツ統一という目標を信じたように、私たちもはるか彼方にあると見えながらも到達可能な目標を設定する必要があります。すなわち、どの子も十分なドイツ語の能力がないまま学校に通わせてはなりません。どの子も修了せずに学校を退学させてはなりません。どの子も就労機会が与えられないまま放置してはなりません。これは私たちの子どもであり私たちの若者なのです。彼らこそ私たちにとって最も大切な存在なのです。

中には1セントの費用もかからないこともあります。必要なのは時間と思いやりだけです。子どもと、それも自分の子どもに限りませんが、一緒に何かをしてみたり、読み聞かせてやったり、子どもの話に耳を傾けたりすることです。私たちに必要なのは、「がんばって！」と子どもたちを励ます親です。私たちに必要なのは、「我々はどの子もひとりひとり支援し、正しく

導くという努力をあきらめない」と言う先生に対する一層の称賛と支援です。私たちに必要なのは、「シュルツェだろうがユルマズだろうが<sup>18</sup>、子どもがいようがいまいが、若者だろうが年寄りだろうが、それに値する人には就労機会を与える」と発表する、一層多くの企業です。

逆境にもかかわらず明るい未来に向けて歩むことができた人々の多くは、決定的な時期に支援をしてくれた人のおかげです。私自身も母が病に倒れたとき、助けてくれた先生や隣人がいました。ごく自然に。SOS子供の村<sup>19</sup>の父、ヘルマン・グマイナーは言いました。「この世界で大きなことが実現するのは、ひとえに義務以上のことを進んで行う人がいるからである」と。

「私たちこそ国民だ」。団結した人々はこの四語で政権をそっくり葬り去りました。この言葉を叫んだ人々は、自身の無力感を克服し、自分が担うと宣言し、責任を引き受けたのです。私たちの子どもにはわが国の歴史ならびに自由、責任、正義のはかり知れない価値を学ばせましょう。

子どもたちには他者と手を携えて将来の課題に取り組むことがどれほど重要なことかを教えましょう。異質なもののや新しいものや競争に対する不安を一笑に付すのではなく、それだけ一層大胆に勇気を持って未来に取り組むのです。不安からは良い助言は得られません。

<sup>18</sup> シュルツェとユルマズはそれぞれ典型的なドイツ人とトルコ人の姓。

<sup>19</sup> SOS子供の村(SOS-Kinderdörfer)は1949年、オーストリアのヘルマン・グマイナー(1919-1986)によって設立された非営利の非政府組織(NGO)で、孤児などを養育する社会福祉施設。現在では世界132の国と地域に組織を持つ。



私たちは欧州連合という形で、どうしたら協力が成功するかというすばらしいお手本を作りました。「多様性の中の統一」が正当にもヨーロッパ (EU) のモットーです。そしてこのモットーにしたがひ、私たちは前例のない国民国家の統合を果たしました。このモットーは全世界に対し、「私たちヨーロッパ人は歴史から学んだのです！」と示しているのです。環境保護、貧困の解消、テロの防止、金融市場の新秩序という緊急の地球規模の課題を、私たちはヨーロッパ人として共同で取り組まねばなりません。世界は変化します。新興諸国は相応の地位を占めつつあります。私たちヨーロッパ人は、たとえ自らの相対的な地位が低下しても、居心地良く暮らせるような世界秩序の構築とともに携わる必要があります。EUに対しては多くの批判があります。しかし私はEUのために尽力することをやめません。

私たちの国にとって1990年10月3日はひとつの希望が実現した日です。

同時にこの10月3日、私たちはまたとない新たなスタートの機会を得たのです。私たちはこの機会を活用しました。みんな一緒にこの成果を誇りに思いましょう。しかしこれで終わりではありません。自由を守り、繰り返し統一を求め、それを実現することが必要なのです。この国をすべての人々にとっての我が家とし、すべての人々にとって公正な社会にすることが求められているのです。この国は私たちみんなの国です。東だろうが西だろうが、北だろうが南だ

ろうが、出身を問わず、みんなの国なのです。ここに私たちは暮らします。ここに私たちは好んで暮らします。ここに私たちは平和のうちにとともに暮らすのです。ここで私たちは統一と正義と自由のために力を尽くすのです。

私たちは勇気と確信を持って前進します。この20年間は、私たちが手を携えればどれほどのことができるかを示しました。

私たちは二重の意味でひとつに成長し、ともに成長した<sup>20</sup>のです。

神がドイツをお守りくださることを。

原題：Rede von Bundespräsident Christian Wulff zum 20. Jahrestag der Deutschen Einheit in Bremen

<sup>20</sup> 「ひとつに成長し、ともに成長した」 zusammengewachsen und zusammen gewachsen：この言葉もヴィリー・ブランドを踏まえている。註4を参照。

## ドイツ連邦大統領クリスチャン・ヴルフによるダルムシュタットの ドイツ・ポーランド協会設立30周年記念式典の演説

中島大輔 訳

2010年11月17日  
ダルムシュタット

変更の可能性あり  
演説を有効とする

ドイツ・ポーランド協会は設立30年を迎えます。これは私たちすべてにとって喜ばしいことです。私は心からお祝いを申し上げます。

1980年当時、私たちは別の世界に暮らしていました。ポーランドとのワルシャワ条約<sup>1</sup>の締結ならびに外交関係の樹立はわずか数年前のことでした。ドイツは分断されており、ポーランドはワルシャワ条約機構のメンバーでした。ダンツィヒ（グダニスク）のレーニン造船所の労働者は大規模ストに突入し、「連帯」の自由化運動が結成されました。コモロフスキ大統領<sup>2</sup>は当時の自らの体験を感動的な言葉で私に語ってくださいました。

この時期に、当時はまだ遠い隣人であったポー

ランドとの相互理解と対話をはかるべくダルムシュタットに新しい協会が設立されたのです。しかしほとんど閉ざされていた国境を越えて、どうすれば対話がかれるというのでしょうか。

きわめて厳しい条件のもと、当時の協会はまず文学と言語による対話を模索しました。設立時のカール・デデツイウス会長<sup>3</sup>は、数多くの翻訳や出版を通して、それまで西側ではほとんど知られていなかったポーランド文学の普及に努めました。それまでなじみのない隣人の顔を私たちに教えてくれたのです。

政治の中心地ボンとワルシャワから遠く離れたダルムシュタットが、対話と相互理解の努力のための舞台を提供してくれたのです。これに対し、デデツイウスさん、私は心からの感謝を申し上げます。

ポーランドにおける戒厳令と自主管理労組連帯の弾圧の時代に、ボンとワルシャワの両国政府間の公式的な政治対話は稀にしか行なわれま

<sup>1</sup> 1970年12月7日に西ドイツとポーランドの間で調印されたワルシャワ条約は、冷戦下にあった両国の国交回復を図るものであった。西ドイツはこれにより戦後のオーデル・ナイセ川国境を承認し、事実上東プロイセン、シュレージェンなど東部の領土を放棄した。1972年6月3日に発効。

<sup>2</sup> 2010年8月に大統領に選出されたプロニスワフ・コモロフスキ（1952-）は共産主義体制のポーランドで民主化運動に携わった。1980年には非合法のデモを組織したとして禁固刑を受けている。

<sup>3</sup> カール・デデツイウス Karl Dedecius（1921-）はポーランド文学とロシア文学の翻訳者。1980年から1999年までドイツ・ポーランド協会の初代会長を務めた。

せんでした。しかしダルムシュタットでは知識人と市民の協力を得て、ドイツとポーランドの間に架け橋が築かれたのです。ドイツ・ポーランド協会はこの間倦むことなく、隣人関係を活性化させ、神話や偏見を戒め、相互に理解することを学ぶよう、力を注いできました。

ポーランド国民と連帯が決定的な役割を果たした鉄のカーテンの崩壊により、ポーランドはドイツにとってまったく新しい意味を持つようになりました。ドイツが今日統一され、ヨーロッパの人々がようやくまたひとつになることができたのは、最初に共産主義を克服し、中東欧の民主化を開始した、ほかならぬ隣国ポーランドの人々のおかげでもあるのです。私たちはこのことを決して忘れません。

1989年の秋はヨーロッパの東西の境界線を開放したばかりではありません。自由なヨーロッパの中でドイツ人とポーランド人を隣人としてひとつに結びつけたのです。市民、学生、科学者の間で長いこと制限つきで行なわれていた対話が、社会のすべての領域で可能になったのです。多くは私たちの厄介な過去との向き合い方を検証しなおすことがテーマとなりました。

これによりドイツ・ポーランド協会も新たな課題を突きつけられました。ディーター・ビン

ゲン新会長<sup>4</sup>は協会をさらに広げ、取り組む領域を拡大しました。協会はビンゲン教授および彼の小さなチームとともに、この新たなチャンスをつえ、学問、文化、政治、経済の分野で対話を行なう舞台を整えたのです。この功績に対してあなたには感謝が捧げられてしかるべきです。

ドイツ・ポーランド協会はこの10年間、ドイツにおいて類を見ない対ポーランド関係の所轄センターへと発展し、今日その存在感はドイツの社会においてかつてないほど高まっています。協会は数多くの催し物を開き、両国の代表的な政治家を名のある専門家や企業、文学者に引き合わせました。

ここでヘルムート・シュミット氏<sup>5</sup>、ハンス・コシュニク氏<sup>6</sup>、リータ・ズュースムート氏<sup>7</sup>、そして残念ながらすでに故人となったマリオン・グレーフィン・デーホフ氏<sup>8</sup>に対しても、心からの謝意を表することをお許しください。これらはみな会長や理事長としてドイツ・ポーランド協会を形づくり、その方向性を与えた人々です。ポーランドとドイツの関係にとってうってつけの偉大で印象的な人物ばかりです。

言語学や地域研究の予算削減が嘆かれた時代、とりわけドイツのポーランド学が様々な削減に

<sup>4</sup> ディーター・ビンゲン Dr. Dieter Bingen は歴史学者。1999年から第2代会長。

<sup>5</sup> ヘルムート・シュミット元首相は1995年に第2代理事長に就任。

<sup>6</sup> ハンス・コシュニク Hans Koschnick (1929-) は社会民主党 (SPD) 所属の政治家。2000年から2005年までドイツ・ポーランド議員団長およびドイツ・ポーランド協会理事長を務める。

<sup>7</sup> リータ・ズュースムート Rita Süßmuth (1937-) はキリスト教民主同盟 (CDU) 所属の政治家。1988年から1998年までドイツ連邦議会議長を務めた。現在ドイツ・ポーランド協会理事長。

<sup>8</sup> マリオン・グレーフィン・デーホフ Marion Gräfin Dönhoff (1909-2002) は長らく Die Zeit 紙の共同発行人兼主筆を務めた。第二次大戦により東プロイセンの故郷を失ったが、戦後のドイツとポーランドの和解に尽力した。1980年よりドイツ・ポーランド協会の初代理事長を務めた。

よって一時的に危機に瀕した時代にあって、ドイツ・ポーランド協会は初の「ドイツのポーランド研究」学会を開くことによって、ドイツにおけるポーランド学の研究を社会に知らしめ、それに対する理解を求めたのです。

ドイツにおけるポーランド語の教育支援も協会の重要な使命です。ドイツのギムナジウム用のポーランド語教科書もドイツ・ポーランド協会によって初めて作られました。ポーランドの文学と歴史の教材も授業の重要な参考書でした。両国共同の歴史教科書のプロジェクトが緒に着く前のことです。

10年前ディーター・ビンゲンとカジミエシュ・ヴィツイツキ<sup>9</sup>によって創立されたコペルニクス・グループは、政治色のない両国の専門家から構成されるグループとして、こうした問題について重要な勧告を発表しました。たとえば最近ではドイツ在住のポーランド系住民グループの役割についてです。これは目下議論的的となっているテーマの一つです。大統領、あなたは今日これからダルムシュタットでポーランド系住民とお会いになるとおっしゃいましたね。私はこの会合がコペルニクス・グループの成果から恩恵を受けているものと確信しています。

これによりドイツ・ポーランド協会は、相手国に関する知識と相手国の言語を教育と授業の中で広めることを目的とした、1991年のドイツ・ポーランド善隣友好条約の実現に向けて重要な貢献を行なったのです。

来年6月のドイツ・ポーランド善隣友好条約の締結20周年を控え、ポーランドの友人と私たちにとって一つのテーマがとりわけ大きな関心事です。すなわちポーランド語をできるだけ多くのドイツの連邦州で授業の言語として提供することです。

ポーランド語の授業をできるだけ多くのドイツの学校で常時提供することが求められます。この授業は、関心を持つドイツのポーランド系住民の子弟にとっても役立つことでしょう。ザクセン州とゲルリッツ市<sup>10</sup>はこの件に関して模範的に先行しています。グローバル化の進展する世界にあっては、私たちが子どもたちや若者にできるだけ多くの外国語を教えることが当然のことにならねばなりません。とりわけ国境地帯では両国共同の幼稚園の設立なども考えられます。

ドイツの学校でポーランド語の授業に重きが置かれるようになると、ドイツの社会全体においてポーランドの文化や隣国ポーランドの重要性も高まるのではないかと私は期待しています。私たちの国で暮らすポーランド人はドイツの社会において欠くことのできない一部を成しています。彼らは統合の成功例そのものです。彼らがドイツの発展に寄与していることを強調するのが私の関心事です。

私たちは今日ドイツ・ポーランド協会とともに30年間の成功の年月を振り返ります。ポーランド国民にとって優先順位の高い政治こそがこ

<sup>9</sup> カジミエシュ・ヴィツイツキ Kazimierz Woycicki (1949-) はポーランドのジャーナリスト。

<sup>10</sup> ポーランド国境に位置するゲルリッツはナイセ川対岸のズゴジェレットとともに、「ヨーロッパ都市ゲルリッツ・ズゴジェレット」として、あらゆる面で国境を越えた協力関係を進めている。

の協会の仕事から恩恵を受けています。ドイツ・ポーランド協会が外務省の委託を受けて運営するドイツ・ポーランド・フォーラム、確実な月例ポーランド分析、教科書の共同編纂、ポーランド研究のネットワーク化。これらはドイツ・ポーランド協会が外交や教育政策の分野で成し遂げた成果のごく一部です。この場を借りて私は、ハーン副州首相さん、あなた方のヘッセン州に、またキュール政務次官さん、あなた方のラインラント・プファルツ州に、ならびに各州の文化担当大臣会議に感謝の意を表します。皆様はドイツ・ポーランド協会の財政支援のために果たした、多大なる貢献に対して御礼を申し上げます。私は先週連邦議会の予算委員会がドイツ・ポーランド協会の制度的支援を決定したことを嬉しく思います。私は連邦議会がこの勧告に従い、これによって協会が将来的にも私たちの両国関係の発展に尽くすことができるよう、連邦が相応の貢献を行なうことを期待しています。

ポーランドとの和解の成就是、依然私たちの歴史的な課題です。私はこれを自分の個人的な課題とも考えています。ドイツとポーランドの友好関係は欧州統合の成功にとっても重要なのです。

私が友人のプロニスワフ・コモロフスキ大統領と会談するのは、ともにほぼ同じ時にそれぞれの国の大統領に就任してから今日で3回目となります。私は12月7日にワルシャワを訪問し、

ちょうど40年前のその日、ヴィリー・ブランド元首相が和解のためにひざまずいた出来事をポーランドの大統領とともに記念するつもりです。来年も私たちは一連の会合を開く予定です。

私はリヒャルト・フォン・ヴァイツゼッカー元大統領<sup>11</sup>が今日ご参列くださったことを嬉しく思います。元大統領はドイツとポーランドの和解のために重要な貢献をなさいました。ポーランドとドイツ両国民の間の信頼を回復させ、今日の私たちの親善関係の基礎を築いたのです。心からの感謝を申し上げます。リヒャルト・フォン・ヴァイツゼッカーさん。

ドイツ人は前世紀ポーランド人に対して筆舌に尽くしがたい苦しみをもたらしました。私は、放逐されたドイツ人にとっても故郷を捨てることを強いられた痛みが今なお癒えていないことを承知しています。過去の数十年間にドイツ人とポーランド人が、きわめて密な社会間のネットワークを結ぶことに成功したことは注目すべきことであると考えます。たとえば公のものを挙げれば、ドイツ・ポーランド協力財団、ドイツ・ポーランド青少年組織、ヨーロッパの協調のためのクライザウ財団、ヴィアドリーナ大学、そしてもちろんこのドイツ・ポーランド協会です。

とりわけ私が強調したいのは、ドイツの連邦州、都市、学校、教会、スポーツ協会、音楽協会、それからポーランドから放逐された人々の

<sup>11</sup> リヒャルト・フォン・ヴァイツゼッカー Richard von Weizsäcker (1920-) は第6代ドイツ連邦大統領 (在任1984年~1994年)。1985年5月8日のドイツ降伏40周年記念の演説では、ドイツの「過去」に対する責任をあらためて問い直し、内外から大きな反響を呼んだ。「過去に目を閉ざすものは、現在にも目を閉ざす」との言葉はあまりにも有名。

郷土会などが結んだ無数の友好関係です。郷土会はその大半が現在の住民との合意のもと、相互理解に努め、かつての自分たちの故郷の村や町の維持や修復に努めています。少なからずのドイツ・ポーランドの友好関係は、戒厳令下の時代に「連帯」の支援組織として成立しました。支援から友好が生まれたのです。

こうしたすべての成果に基づき、私たちがこれから取り組むべき大きな課題は、私たちの東の隣国との友好関係をさらに緊密にすることにより、ヨーロッパの内なる統一を完成させることです。

かつて西の隣国との和解は、ドイツが西の国家連合すなわち NATO や統一欧州に統合を果たす上で重要な前提条件でした。同じ統合のレベルと協力の密度を私たちは今度は東の隣国、とりわけ直接の隣国であるポーランドとの間で実現させようと望んでいます。この点で私は同僚であるポーランド大統領と完全な意見の一致をみています。

歴史上初めてドイツとポーランドは同じ国家同盟と価値共同体に所属し、EU と NATO の中で密接に結ばれています。これからの私たちの共同課題は、欧州の発展的統一という使命を東の隣国にも広げることです。ウクライナ、ベラルーシ、モルドバ、およびグルジアとの東方パートナーシップ<sup>12</sup>とロシアとの協力関係は私たちの共同の利益に叶うものであり、信頼と相互理

解の精神に則ってポーランドとドイツの国民の力で実現されるものなのです。

ポーランドは今日EUの誇り高いメンバーであり、シェンゲン圏の信頼の置けるパートナーであり、NATOの積極的なメンバーです。ポーランドは初めて2011年の下半期にEU議長国に就任します。ポーランドはまた欧州議会の議長を送り出しています<sup>13</sup>。私たちは今日、ともにヨーロッパ(EU)を形成し、世界における責任を引き受ける、自由な強いポーランドを隣人としています。これはすばらしいことです。

ドイツ・ポーランド協会は私たちドイツ人にポーランドを親しい存在にしてくれました。協会は今日でも重要な助言者です。というのは喜ばしいことに両国間の交換と交流の需要は大きいからです。私はドイツ・ポーランド協会の30歳の誕生日にお祝いを申し上げ、今後とも実り多い幸せな将来をお祈りするものです。

原 題：Bundespräsident Christian Wulff beim Festakt zum 30. Jahrestag der Gründung des Deutschen Polen-Instituts Darmstadt

<sup>12</sup> 東方パートナーシップはEUの隣国政策の一環で、アルメニア、アゼルバイジャン、グルジア、モルドバ、ウクライナ、ベラルーシのEU接近を目標とするもの。2009年5月7日のプラハEU首脳会議で設立が決定された。

<sup>13</sup> イェジ・ブゼク元ポーランド首相は2009年7月から欧州議会議長を務めている。



# 「ヨーロッパ — 和解の大陸？」会議におけるドイツ連邦 大統領クリスチャン・ヴルフの演説

中 島 大 輔 訳

2010年12月7日

ワルシャワ

変更の可能性あり  
演説を有効とする

2日前、待降節のお祝いの席で、福音ルター派ハノーファー州教会のホルスト・ヒルシュラー元司教は、40年前の1970年に待降節をどう迎えたかを私に話してくださいました。当時、若い聖職者たちの頭に浮かんだ考えは、極端に言えば次のようなものです。「もし私たちドイツ人がポーランド人との和解に成功しなければ、私たちのこれまでの生活は無駄だったのだ」と。それはヴィリー・ブランドがワルシャワのゲットー記念碑の前でひざまずいた直後のことでした。

当時私は11歳でした。ひざまずく首相の映像は私に深い感銘を与えました。私は少年としてこの身振りの意味を他の少年と同様に感じていました。その謙虚さが今もなお私たちの心をつかむ身振りで。和解を請うた身振りで。

それゆえ私はコモロフスキ大統領閣下ならびにフリードリヒ・エーベルト財団に対し、それから40年後の今日、ワルシャワにお招きいただいたことに、感謝を申し上げるものです。

ヴィリー・ブランドは、自身ナチスに抵抗した身でありながら、ショアの数百万人の犠牲者に対して、多くはポーランド国民であった女性や男性や子どもたちに対して、ひざまずくことにより、民主的なドイツの首相の立場からドイツ国民を代表して類例のない敬意を捧げたのです。彼は過去、現在、そして未来に対して、包括的な意味における責任を引き受けたのです。

ヴィリー・ブランドは回想録で書いています。「私はドイツの歴史の奈落を前に、殺害された数百万人の重荷を感じながら、言葉が出ないときに行なうことを行なった」

この行為により、今までとは別のドイツ人のイメージ、別のドイツのイメージ、すなわち隣人との和解を求める、自由で民主的で平和を愛するドイツのイメージが形成されていったのです。

ほかならぬポーランドとのあいだです。何と言っても、ポーランドはナチスドイツの犯罪のもと、途方もない苦しみを味わったのです。当時ドイツ人によって行なわれた想像もつかないほどの残虐行為は、私たちドイツ人の心を恥辱の思いで満たします。コモロフスキ大統領と一緒にワルシャワ蜂起の記念碑とゲットー記念碑に花輪を捧げることができたのは、私にとって

感動的なことでした。すでに9月にコモロフスキ大統領がドイツを訪問された際、私たちはザクセンハウゼン収容所を訪ね、ポーランド国内軍のグロート・ロヴェツキ指揮官<sup>1</sup>の独房で首を垂れました。数日前、私はヤド・ヴァシエム<sup>2</sup>でヤヌシュ・コルチャック<sup>3</sup>の記念碑に小石を捧げました<sup>4</sup>。コルチャックは自分が面倒を見ていたユダヤ人の孤児たちと一緒にトレ布林カで死に赴いたのです。

ナチス政権による野蛮な侵略行為の後、「関係正常化」に向けた条約の交渉を行なうために、ポーランドがどれほどの努力、いや克服を必要としたかを、私たちドイツ人は認識する必要があります。

その5年前のことでした。ポーランドの司教とりわけ、プレスラウ（ヴロツワフ）のコミネク司教とクラカウ（クラクフ）のカロル・ヴォイティワ大司教、すなわち後の法王ヨハネ・パウロ二世が、「私たちは許します。そして許しを請います」というあの胸をつく言葉で、ドイツに向けて和解の手を差し伸べたのでした。「私たちは許します。そして許しを請います」という言葉は、ポーランドで激しい議論を呼び起こしました。しかし勇気ある正しい言葉でし

た。しかしすべての人が洞察し、認識し、認めようとしたわけではありません。

ヴィリー・ブランドも自らの人生行路から、和解と自由の力に対する責任を負っていると考えていました。彼はとりわけ若い世代に大きな影響を与えました。彼の姿勢はその後ほどなくノーベル平和賞受賞という形で国際的に評価されました。

ワルシャワ条約は東西対立の時代に締結されました。ドイツ連邦共和国（西ドイツ）とポーランドは別々のブロックに属していました。ポーランドにはまだ民主化の道のりは閉ざされていました。このような1970年代初頭の政治的現実を前にして、最初は現状調査や現状に基づくゆるやかな変革を達成することがせいぜいの目標でした。これらは最終的な決定を行なうものではなく、過去の教訓を通して未来への期待を開くものでした。当時のドイツのシェール外相は「私たちが目指すのは治癒のプロセスである」と述べていました。

悲劇的な国土分割という歴史の経験を経たポーランドにとって、国境問題は決定的な重要性を持ちます。ポーランドは確定した不可侵の国境

<sup>1</sup> ステファン・パヴェウ・ロヴェツキ Stefan Pawel Rowecki（グロートは偽名。1895-1944）はポーランドの軍人。1940年にナチス・ドイツに抵抗する地下組織軍（後に国内軍）の司令官に任命されたが、1943年に逮捕され、翌年8月にザクセンハウゼン収容所で殺害された。

<sup>2</sup> ヤド・ヴァシエム Yad Vashem はホロコーストの犠牲者を追悼するイスラエルの国立記念館。1953年8月エルサレムに設立され、正式には「ホロコーストにおける国家イスラエルの殉教者と英雄の記念館」と称する。

<sup>3</sup> ヤヌシュ・コルチャック Janusz Korczak（1878または79年-1942年）は小児科医で教育家、児童作家。ワルシャワに子どもの自治を取り入れた孤児院を設立し、院長として教育にあたった。1989年に国連総会で採択された「子どもの権利条約」は彼の思想を基にしている。

<sup>4</sup> ユダヤ教では墓参の際、花の代わりに小石を墓石に置く。この伝統は比較的新しく、19世紀来とされるが、その由来についてはいまだに定説がない。ヴァルフ大統領は11月28日に17歳の娘アンナレーナを伴ってヤド・ヴァシエムを訪問した。

に囲まれて暮らせる保証を求めています。しかし、オーデル・ナイゼ線を含めたヨーロッパの現状を事実上承認することは、当時多くのドイツ国民にとって、きわめて辛い一歩を意味しました。

ドイツの社会ならびに連邦議会では、ブランド、シェール政権のいわゆる「新しい東方政策」をめぐる、激しい論争が繰り広げられました。リヒャルト・フォン・ヴァイツゼッカー元大統領の表現を用いれば「全身全霊をあげての」論争です。その理由はまず、故郷を追放された数百万人のドイツ人ひとりひとりが驚愕する内容であったためです。しかしソ連やポーランドとの条約から、ドイツの再統一に向けて一層のチャンスが生まれるのか、一層のリスクが生まれるのかという点も問題となりました。1972年2月に行なわれた連邦議会における東方政策の議論では、多くの国民が深い懸念を抱いていることが明らかになりました。私はドイツの将来をめぐる当時の懸念を理解できると皆様に申し上げたいと思います。たとえ私たちが祖国の再統一という幸運に恵まれた今、懸念は幸い杞憂に終わったと言えるにしても。私はブランド元首相のひざまずいた行為を、ワルシャワ条約の内容をめぐる綱引きとは切り離して考えています。あの行為は犠牲者に対し首を垂れるものであり、ポーランド、イスラエル、そして全世界に対する責任を認めたものでした。

ドイツとポーランドの真の和解と国境問題の

最終的な解決は、共産主義諸国の平和的、民主的革命ならびに鉄のカーテンとベルリンの壁の崩壊を経てはじめて実現しました。統一ドイツとポーランドは以来20年以上にわたり、自由な民主主義国家として統一ヨーロッパの中で、冷戦時代とはまったく別のやり方で手を差し伸べてあります。人々は互いに出会い、自由に対話し、プラスの共同の経験を通じて、無知から生まれる偏見を克服しているのです。ひざまずいた写真が過去にはポーランド国民の目から遠ざけられたり、修正されて発表されたことはありました。しかし今日では情報公開の透明性があります。

他の多くの人々を代表して、私はここで1989年から1990年の転換期における重要な個人的貢献に対して、ポーランドのマゾヴィエツキ元首相<sup>5</sup>に心から感謝の意を表します。ならびに倦むことなくドイツ・ポーランド間の和解と相互理解に尽力されたバルトシェフスキ政務次官<sup>6</sup>にも心から感謝いたします。私はお二人が今日ここにご列席されていることを、たいへん嬉しく思います。

感謝と尊敬と評価は、残念ながら今年2月に逝去された当時のクシトフ・スクビシェフスキ外相<sup>7</sup>にも捧げたいと思います。

東欧における共産主義体制終焉のシグナルを発し、ポーランドに民主主義を獲得し、平和と自由のうちにドイツ統一の道とともに切り開い

<sup>5</sup> マゾヴィエツキ Tadeusz Mazowiecki (1927-) は1989年8月から1990年12月まで首相を務めた。

<sup>6</sup> バルトシェフスキ Wladyslaw Bartoszewski (1922-) は1995年および2000年～01年にポーランド外相を務めた後、2007年11月からトウスク首相のもとで政務次官兼外交政策顧問に就任している。

<sup>7</sup> スクビシェフスキ Krzysztof Skubiszewski (1926-2010) は1989年9月から1993年10月までポーランド外相。

たのは、ポーランドの「連帯」でした。「連帯」とその勇気あるパイオニアたちは、今日のドイツとポーランドのこれほどの接近に対して、二重の意味で決定的な貢献をしたのです。このポーランドの自由化運動「連帯」の真に歴史的な意義は、1980年代にはすべてのドイツ人から等しく認識されていたわけではありません。私は勇気あるポーランドの自由の戦士が西の民主主義諸国から一層の支援を期待していたことをよく承知しています。かなりの人々は東西ブロックの固定化を受け入れてしまい、共産主義の独裁政権が揺らぐ可能性を考えませんでした。私はドイツ統一の記念日に「連帯」の貢献を強調しましたが、この場でも感謝を捧げます。

私たちは私たちの歴史、ヨーロッパの歴史という長い道程を歩いてきました。私たちの共通の政治は平和と安全の願いによって規定されています。分断するものは結びつけるものになりました。ヨーロッパ（EU）の中にドイツとポーランドの未来があるのです！私たちはヨーロッパのためにドイツとポーランドの友好関係を支持します。ロシアとの関係は変わり、改善されます。先ほどメドヴェージェフ大統領がポーランドを離れたばかりです。そしてコモロフスキ大統領は今日のうちにワシントンに向かい、オバマ大統領と会談します。このような今日のポーランドの役割にはどれほど大きな可能性があることでしょうか。

今日、ドイツとポーランドの人々にとって、障害なく旅行できることは自明のことです。ポーランド人とドイツ人は、ポーランド出身のドイツのサッカー選手のゴールに熱狂しています。若者はシュヴァルツヴァルトでスキーをしたり、

マズール地方でカヌーをしたり、あるいはベルリンやワルシャワと一緒にパーティーを開いたりしています。しかしこうした当たり前のことも、苦勞して獲得した成果であり、そのためには幾度となく難しい問題を克服しなければならなかったのです。このことを私たちは今日想起しましょう。こうした礎の上に私たちのさまざまな努力が成り立っているのです。

どんな条約も結局のところ、国民と国民の間の友情と安全を保証する唯一の要素、すなわち善隣友好関係への意思と信頼の代わりにはなりません。

善隣友好関係は勝手気ままなものではありません。善隣友好関係はエネルギーを必要とします。忍耐力と粘り強さを必要とします。しかしその価値があります。そしてその価値があるがゆえ、私たちはこの基盤に基づいて共同の未来の目標を描けますし、描こうと思うのです。

フランスを除けば、ポーランドほど私たちが密な連絡のネットワークを持っている国はありません。過去数十年の間にこのネットワークはいよいよ密なものになりました。例を挙げれば、ドイツ・ポーランド協力財団、ドイツ・ポーランド青少年組織、そして数週間前コモロフスキ大統領と私とその設立30周年をダラムシュタットでお祝いしたドイツ・ポーランド協会、ヨーロッパの協調のためのクライザウ財団、ヴィアドリーナ・ヨーロッパ大学、そしてもちろん数多くの州、都市、学校、教会、スポーツ協会、音楽協会やポーランドから追放された人々の郷土会などです。最後に挙げた郷土会は、現在そこに暮らしている住民との合意のもとに、相互

の理解やかつての故郷の村や町の保存・修復に努めています。少なからぬ数のドイツ・ポーランド間のパートナーシップが戒厳令下の時代に「連帯」の支援組織として成立しました。支援から友好が生まれたのです。

他の多くの機関も、日々の生活を通じた人と人との理解を深めるべく、大きな貢献をしています。たとえばドイツとポーランドの政府委員会は、教育面での協力のために第4委員会を設置することで合意しました。授業用のドイツ・ポーランドの歴史教科書に関する共同の構想が発表されたところです。これは大きな試みです。ワルシャワ蜂起の博物館、建設中のポーランドユダヤ人歴史博物館、第二次大戦に関するダンツィヒ（グダニスク）の博物館の計画、避難と追放に関するベルリンの博物館の計画は、記憶の文化という一章において、適切な議論を可能にするものです。

ドイツ人とポーランド人はともにオーデル河の洪水を防ぎました。共同のセンターではドイツとポーランドの警察官や税関吏が協力して働いています。国境地帯のいたるところで両国の善隣外交関係について肯定的な評価を耳にします。

信頼を確かなものにし、それを日々あらたに獲得し、具体的な形で息を吹き込むこと、そのためには人と人との出会いが必要なのです。それも絶えず繰り返しながら。2004年9月1日、ドイツのポーランド侵攻から65周年を迎えたこの日、私は当時のポーランドのベウカ首相とクライザウにおいてドイツならびにポーランドの若者と初の討論に臨みました。今朝、コモロフ

スキ大統領と私はまたドイツとポーランドの若者との討論を行い、その印象を強くしました。すなわち大事なものは人と人との出会いであるということです。今日のポーランドとドイツの関係はまことにすばらしく、友好的で良い状況にあります。私たちはこの関係を友人同士として積極的に構築できるのを嬉しく思います。ホルスト・ヒルシュラー元司教の言葉を借りて締めくくりましょう。私たちのこれまでの生活は無駄ではなかったのだと。

原題：Bundespräsident Christian Wulff auf der Konferenz “Europa – Kontinent der Versöhnung?”

## 解説

ここに訳出したのは、ドイツ連邦大統領クリスチャン・ヴルフが2010年10月から12月にかけて行った三つの演説である。ヴルフ大統領は1959年6月生まれ。ホルスト・ケーラー前大統領の辞任を受けて行われた昨年6月の大統領選挙で、社会民主党の推すヨアヒム・ガウクを決選投票で抑え、51歳の若さで大統領に就任した。

10月3日の統一20周年記念式典の演説は、新大統領の「初の大きな、真に重要な演説」(“Die Zeit”紙)として注目を集めた。とりわけ「イスラームもドイツの一部である」という一節は、国内外で大きな反響を呼び、大統領の出身母体であるキリスト教民主同盟(CDU)の姉妹政党キリスト教社会同盟(CSU)など保守層の一部からは批判の声も挙がった。「大統領がドイツのイスラームをキリスト教やユダヤ教と同列に位置づけるのであれば、私は誤りであると考える」とCSUのノルベルト・ガイス連邦議員は語った<sup>1</sup>。11月23日付けの朝日新聞も「移民への寛容を訴えた大統領に対し、保守派を中心に反発」が強まったと報じている。しかし大統領がこの言葉で訴えたのは、イスラームの位置付けや「移民への寛容」なのだろうか。

30分に及ぶ演説の中で、ヴルフ大統領は旧東ドイツの国歌の一節を引きながら、「ドイツ、一つの祖国」の今日的意味を問いなおす。統一から20年を経た今、新たな「統一」Einheitあ

るいは「団結」Zusammenhaltはどこに求めねばならないのかと。

大統領は最初の答えとして「共通の歴史の想起」を挙げ、統一へのプロセスを回顧し、感謝を捧げる。まずこれまで十分に評価されてこなかった東ドイツ市民の改革への勇気。続けて、ベルリンの壁崩壊を導いた隣国ポーランドの自由化運動やハンガリー政府の国境開放の決定、ならびにソ連のゴルバチョフ書記長の覇権放棄、さらにアメリカをはじめとするNATO諸国、ならびに和解に尽くしたドイツの政治家に対する感謝である。

それでは「統一」の今日的意味はどこにあるのだろうか。統一から20年、グローバル化の流れを受けてドイツはこれまで以上に国際化し、社会は差異化と多様化が進んだ。大統領は多様性を尊重しながらも、老人と若者、富める者と貧しい者、国民と政治家など、社会のさまざまな断裂に目を向け、これこそが新たな「統一」の課題であるとして、その隔たりを埋める努力を求める。

「統一」は目下焦眉の問題となっている移民問題にもあてはまる。「私たちはひとつの国民だ」—この20年前の統一への呼びかけを、大統領はドイツで暮らすすべての人々に向ける。もちろん移民も例外ではない。「ドイツで暮らすためにはドイツ語を学ばねばならない。またドイツではドイツの法律が適用される。なぜなら私たちはひとつの国民であるから」と。そのた

<sup>1</sup> Die Zeit (Online), 2010年10月5日



めに、移民に対する語学や宗教の授業を含めた統合プログラムの充実を求める。

「ドイツ、一つの祖国」？に対する三番目の答えとして、ヴルフ大統領は憲法と憲法で定められた価値の尊重と遵守を挙げる。人権、言論の自由、信仰と良心の自由、男女の同権。大統領はここに出身国の文化や宗教に関わらず、すべての人々が守らねばならない「一つの祖国」としての規範を考えている。また誰もが責任を担い、誰もが責任を回避しない共同体の構築に、今日の「統合」と「統一」の目標を置いている。最後にあらためてドイツ統一20年の成果を讃え、自由を守り、繰り返し「統一」を求め、公正な社会を実現するよう国民に訴えて演説を締めくくる。

さてこのように辿ると、大統領の主張はきわめてまっとうなもので、むしろ「手強い」(Die Zeit) 内容であると言えるだろう。ここではキリスト教やユダヤ教に対するイスラームの位置付けが問題になっているのではない。また「移民への寛容」を訴えているのでもない。大統領が呼びかけているのは、移民を排除したり、特別視したりするのではなく、同じドイツの国民としての等しい権利と義務に基づいた社会的統合をはかることである。そのために一層の語学教育や宗教教育ならびに統合プログラムの充実を求めると同時に、移民に対しては憲法と憲法の価値を守ることや社会的サービスのいわば「ただ乗り」を戒め、子どもにドイツ語を学ばせ、学校に通わせ、自立をはかるなど、具体的な要求を掲げていることが注目される。

このような大統領の統合の呼びかけに対し、そもそもイスラームの価値観が人間の尊厳の不可侵や人格の自由を謳ったドイツの基本法と相容れず、イスラームの社会では政教分離もありえないことを指摘し、統合の可能性について否定的に考える論説<sup>2</sup>もあるが、一方でドイツ・ムスリム中央評議会のアイマン・マズィエク議長は「ドイツのすべてのムスリムに対する明快で明確かつ重要なシグナルである」「ヴルフ大統領の演説はムスリムが二等市民でないことを示した」「大統領は異なる生活様式と多様性が望ましいと明確に述べた」として、ヴルフ大統領の演説を歓迎している<sup>3</sup>。

またドイツ統合・移民財団の専門部会も「もっと早く大統領府から聞いたかった内容」であるとして基本的に評価し、とりわけ教育への投資拡大と統合プログラムの充実、ドイツで教育を受けたイマームによるイスラームの宗教教育という具体的な提案を称賛した<sup>4</sup>。

緑の党のユルゲン・トリティーン議員団長は、「演説はむしろ保守層に向けて二三の基本的真理を分からせる内容で、目新しいものはない」と冷やかに評したが、与党キリスト教民主同盟(CDU)からはおおむね高い評価を得た。アネッテ・シャヴァン教育・科学研究相は「考え抜かれた力強い演説であり、私たちが統合を重荷ではなく好機と捉えることができるよう、私自身励まされ、また責任を自覚した」と述べた。トーマス・デメジエール内相も「私たちは大統領の呼びかけを喜んで引き受ける。これはきわめてすぐれた10月3日の演説である」「ヴ

<sup>2</sup> Ulrich Geiner, “Unser Islam?” in : Die Zeit (Online), 2010年10月7日

<sup>3</sup> Die Zeit(Online), 2010年10月4日

<sup>4</sup> 同上

ルフ大統領はすべての大きな課題に触れ、現在は別の意味で統一を問題にしなければならないことを教えてくれた」と評価した<sup>5</sup>。

11月17日のドイツ・ポーランド協会設立30周年記念の演説と12月7日のヴィリー・ブラント元首相のゲットー記念碑前での謝罪40周年記念の演説は、ドイツの「過去」ならびにポーランドをはじめとする隣国との和解に対するヴルフ大統領の姿勢を明らかにするものである。

ここでも大統領は戦後のドイツ・ポーランド関係を振り返りながら、関係改善に努めた人々や団体の功績を讃えている。とりわけここで強調されているのは、文学などの文化や教育上の交流であり、あらゆるレベルでの人的交流である。

「信頼を確かなものにし、それを日々あらたに獲得し、具体的な形で息を吹き込むこと、そのためには人と人との出会いが必要なのです。それも絶えず繰り返しながら」

大統領が最も重要な隣国と位置づけるポーランドとの関係において、ヴルフ大統領は両国の若者やコモロフスキ大統領との「出会い」を通して、この言葉を自ら実践しているのではないだろうか。

翻訳にはいずれもドイツ連邦大統領府のホームページ (<http://www.bundespraesident.de/>) で公開されている演説原稿を用いた。なお本文中の ( ) は訳者による補足である。

---

<sup>5</sup> Die Zeit(Online), 2010年10月4日